

名古屋「熱田空襲」

まず4枚の写真から。上左は越智久美子『私たちの戦争 中京高女の学徒動員と熱田空襲』中日新聞社、2016年の表紙。その右から先日のまち歩きで撮った白鳥橋。空襲により表面にくぼみのできた堀川沿いの護岸壁。そして白鳥橋西詰めかどには、次のような慰霊碑が静かに立っている。最初に訪ねた時には、これが先日レポートした「愛知時計電機」正面の慰霊碑だと思った。もう一度歩いてみて、こちらが白鳥橋西の慰霊碑だと分かった。



先に紹介した『名古屋大空襲』毎日新聞社から、「熱田空襲」の状況を再現していこう。

初めて使われた1トン爆弾が、工場と、逃げまどう人々の上に相ついで投下された。わずか10分の空襲による死者2千7百余人、重軽傷者3千数百人。

付近で唯一最大の“安全地帯”とされた白鳥橋下では、橋の中央北詰め寄りをねらった爆弾で、数百人が泥人形のように死んだ。西へ伸びる十八間道路(現国道1号線)は、血まみれの負傷者であふれた。堀川が赤黒く染まり、爆風で舞上がった白鳥貯木場の無数の原木が、堤防道路を逃げる人の群れの上に降った。一番町の共同防空壕が90度ねじれてつぶれ、72人が圧死した。爆弾あとの穴に死傷者の血が流れ込み“血の池”ができた。負傷者収容所となった白鳥国民学校(現白鳥小学校)はまたたく間にいっぱいとなり、鶴舞公園まで回送を余儀なくされた。

しかもなお多くの死体が路上に放置され、電線に肉片がかかっていた。その結果が死傷者6千余人。それも確定数ではなく、遺体さえ不明の死者も数多いといわれる。

そしていま、白鳥橋西詰めかどには、つぎのような慰霊碑が静かに立っている。

為第二次大戦非戦闘員横死者諸霊之追善菩薩

昭和二十年六月九日、此の白鳥橋周辺に於て米軍の爆撃により、無量数百名の一般人命を失なひ、よつて将来の平和と安定を祈り、被爆死者等の冥福を謹みて祈願するものである。

維時昭和三十三年八月吉祥日

(2016年7月29日)